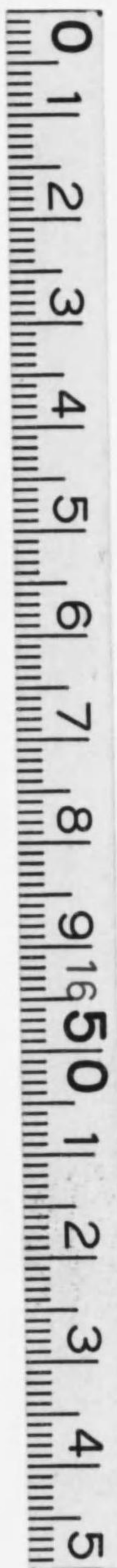


特 241

937

外村義郎著

求道の志をり



始



特241
937



外村義郎著

求道の志をり

アルパ社書店刊





祈 禱

在天の父なる神よ、爾は今を距ること千九百有餘年の古昔、愛し給ふ獨子耶穌基督を此世に遣したまふて、爾の御姿を現はし、また耶穌基督の十字架によりて、全世界人類の罪を贖ひ、罪の赦しを與へ給ひしのみならず、死して三日目に甦り、四十日の間、くしき働きを續け、昇天して、爾の右に坐し、御約束の聖靈を降したまふて、大なる能力を現はし、古も今も今後ちも變ることなく、救ひの御事業を續けたまふことを感謝いたします。

我儕は罪の腹より生れ、罪の世に成長して、罪と穢れとにみち、其魂は滅亡のほかなきものなるにも拘はらず、御聖靈の御指導を受け、その御恩化にあづかり、今は救はれて、爾を天の父と崇め、耶穌基督を主と仰ぎて、感謝と喜悅と能力と希望とにみたされて生活を爲す、此幸ひを得しめたまふにより感謝いたします。

我儕は此大なる恩寵を獨占して満足して居ることは出来ません。我儕の同胞兄弟姉妹にも、この福音を宣傳して、その恩寵にあづかるもの一人も多からんことを祈りに祈るものであります。今私は其志の萬一を現はしたく、此の『求道の志をり』を世に出すことになりました。御心に叶はゞ之を祝して、その御用の一端に加へ給はんことを、主の名に於て祈り奉る。アーメン

昭和十年一月十五日

外村義郎

目次

序に代へて……………	一
友情の宗教……………	五
切支丹でないか……………	一〇
問題の聖書……………	一五
初に映じた教會……………	二〇
時代は移る……………	二六
耶蘇は過ぎ給ふ……………	三三
障害物……………	四〇
今日この家救はる……………	四五

求道の志をり

外村義郎著

序に代へて

ヴキクトル・ユーゴー、其著『ラミゼラブル哀史』に序して曰く、貧困による男性の墮落、饑餓による女性の破滅、榮養不良と放縱による兒童の廢類の現象が、人間の世界から取除かれぬ以上は、此書の世に存在する價値は充分にある。と、彼は此書の價値をその内容において明かに應へてゐるのである。

拙著「求道の志をり」は決して傑作ではない。然りながら世の中に神に對する罪惡の存在する限り、かゝる書物の必要を確信するものがある。如何となれば全世界の人類を其罪と滅亡より救ひ、神との正しき關係に歸らしむるものは信仰であつて、在天の父なる神と、其神の遣はし給へる耶穌基督の十字架の贖罪を信ずるその信仰によりてのみ人は救はれて、神の前に義とせらるゝからである。そこに鴻大なる神の恩恵がある。

信仰とは何か。私はそれを朋友の關係と答へる。朋友信ありである。今日、東から來たものと西から來たものが、何處かで出會ふたとする。假令それが一見舊知のごとき感を有つたとしても、君と僕とは朋友だとは言へない。その會ふたのを初めとして、次第にその交際を

續けてゆくうちに、何時しか甲の心は乙に通じ、乙の心は甲に通じて遂には一身上の秘密をも打明け、大切なる物をも安心して預けることが出来るやうな間柄となつて來るのである。

そのときは既に朋有の關係が成就したので、隨て相互に慰められ、勵まされ、又た力づけられ、こゝに安心と平和と希望が満されて來るのである。斯の如く救ひは、耶穌基督との友情の關係をもつことに由りて完成さるゝのである。

私はその眞理を新約聖書に記述さるゝザアカイに學んだ。彼は友情の關係よりして耶穌基督に導かれ、思ひに勝る救ひの恩寵に與かつたのである。かくて耶穌基督は歡喜びと満足を現はされ、「けふ救ひは、この家に來れり。此人も亦アブラハムの子なればなり。それ人の子の

來れるは、失せたるものを探ねて救はん爲なり』と宣はせ給ふたのであつた。

四

これは求道者に對して最もよき暗示を與へる、極めて適切なる救ひの物語りである。私はこの聖書物語りを講解的に記述した。幸に此書が祝福をうけ、世に救はれざる人の有らん限り用ゐられて、ザアカイの如く救ひの歡喜に入るもの多數に起らんことを、切に希望せざるをえない。

友情の宗教

エリコに入りて過ぎゆき給ふとき、視よ、名をザアカイといふ人あり、取税人の長にて富める者なり。イエスの如何なる人なるかを見んと思へど、丈矮うして群集のために見ること能はず、前に走りゆき、桑の樹にのほる。イエスその路を過ぎんとし給ふ故なり。

イエス此處に至りしとき、仰ぎ見て言ひたまふ『ザアカイ急ぎおりよ、今日われ汝の家に宿るべし』

ザアカイ急ぎおり、喜びてイエスを迎ふ。人々みな之を見て咄きて言ふ『かれは罪人の家に入りて客となれり』ザアカイ立ちて言ふ『主、視よ、わが所有の半を貧しき者に施さん若し、われ誣ひ訴へて人より取り取りたる所あらば、四倍にして償はん』

イエス言ひ給ふ『けふ救はこの家に来れり、此人もアブラハムの子なればなり。それ人の子の來れるは、失せたる者を尋ねて救はん爲なり』(ルカ傳第十九章一一〇)

耶穌はエルサレムに登りたまふとき、ヨルダン河を東より西に渡りエリコの街に入り、そこを過ぎ行かれたのであつた。此街にザアカイといふ取税人の長で、富める人が居たが、耶穌の通過するを聞き、如何なる人であるか、それを見ようとして出懸けたのであつた。

さてこのザアカイは、如何なる動機で耶穌を見ようとしたのであるか。之を検討すると、そこに二つの理由がある。その一つの理由は友情關係であつたと思ふ。耶穌の弟子のうちにマタイといふ人が居た。此人も以前は税吏であつて、ザアカイとは知り合ひの間柄であつたに違ひない。一方は税吏の長、一方は單なる税吏、このあひだに友情の關係のあつたことは想像にかたくあるまい。

マタイは曾てザアカイに向ひ、「君、一度耶穌に會つて見たらどうだ。

一言でもよいから、其御話を聽いてみるがよい。耶穌こそ實に神の遣はしたまへる救主である。」と、斯う勸告られて居たのではなからうか。そこでザアカイは耶穌が御通りになると聞いたので、一目だけでもよいから見ようと思ひ、駈け出したのであらう。基督教は有情の宗教である。

私は毎々、志道者にむかひ、「あなたは如何なる動機で志道者になられたか」と訊くが、そのとき彼らは、きまつて次の如く言ふ、「私の友人に熱心な基督信者がありまして、此人より信仰を勸誘られて基督教を信仰してみようといふ氣持ちになりました。」と、私が高知に傳道したとき、一人の青年に、これと同様な問ひをかけますと、青年は次のやうに答へるのであつた。

八
『私は高知教會の玄關で基督信者になつたのです。私の友人に、一人の熱心なる基督信者がありました。彼は幾度となく私に基督教をすすめるのであるが、私に取つては、基督教が可いとか不可いとかの問題でなく、たゞ何となく嫌ひであつたから、何とか彼とか、理屈をこねて、彼に取合はないやうにした。さうすると友人は卑怯だと言ふ。そこで私も憤然とした。何が卑怯だ。男子卑怯といはれては我慢ができません、私はひどく立腹した。』

そこで友人が言ひますには、僕は幾度も君に對して一度、高知教會の多田牧師の説教を聴けといふのに、君は、何とか彼とか口實を設けて教會に來ないではないか。然も僕のごとき信仰の薄弱な、知識の足りない、無經驗な者を捉へて、蔭で理屈を言ふから卑怯だといふのだ。

腹が立つなら、一度、教會に來てみたまへ。

よし、それなら、ゆく。教會ぐらひは恐れないのだ。斯んな争論をした揚句、ある日曜日の朝十時、教會の集りに行くと驚いた。其の敷居をまたいで玄關に入ると、その玄關に時の衆議院長片岡健吉先生が立つて居るではありませんか。その片岡先生が私に草履を出してくれました。君、この草履を御穿きなさい。下駄は下駄箱に入れるのです。そして前の方の椅子に腰を掛けて、先生の説教をよく御聴きなさい。

之には驚いた。私は爆弾でも投げ付けられたやうな思ひをした。基督教に對する私の傲慢な心は、片岡先生のいとも謙遜なる態度によりて粉碎されて了ふたのでありました。此時の多田牧師の説教も犇々と

私の胸にこたへた。このとき私は、基督信者になるといふ決心をしたのであります」と、實に尊き神の攝理である。

切支丹でないか

私の郷里は滋賀縣彦根である。現在は私の宅から四丁も歩くと、彦根驛があり、そこから汽車に乗ると、十二時間の後ちには、眠つてゐても東京驛に着くのであるが、其頃はさうは行かない。

東京に行くには、先づ彦根城の西の長曾根から汽船に乗り、それで湖北の長濱に渡り、そこから美濃の大垣まで汽車で行き、大垣から船にて桑名にいで、それより人力車にて四日市に到り、再び汽船に乗りて横濱に渡り、そこより汽車にて新橋に着くのである。斯様な途順を

經て上京するのであるから、當時、我々が東京に来るのは、今日此頃アメリカに行くより、もつと、おつくうに考へたのであつた。

何しろ此長途の旅行を、なにの経験もなき、私がするのであるから母は非常にこの旅行を心配したらしく見受けられた。母は、私の出立に際して、細々と親切に注意をあたへてくれた。そして最後に、東京へ行つたら必ず善良な人を友達にせよ、決して悪友と交るのでない。これは堅く言ひ付けおく、と言はれたのであつた。幸に私は親戚の世話になつたから、誘惑にかゝる心配はなかつた。

其後、商業學校に學び、ある銀行に奉職したのであるが、何も知らない私が、多数の行員のゐる銀行に放り込まれたのであるから、何をどうして可いのか、薩張り分らなかつた。下手なことをしては笑はれ

るし、笑はれては氣持ちは宜くないし、非常に心細く感じたのであつた。此時、母の「善良な友を得よ」と言はれた語を、私は頻りに憶ひ出した。

かくて私は、環境を見廻はして心中竊かに良友を探し求めて居たのであるが、一人、良き友を見つけた。此人は私と机を隔て相對してゐた。歳は私より二つ三つうへだらうと思ふたが、眞に几帳面で、純眞で、また親切で、勉強家で、讀書家であつた。そのころ銀行に勤めて居た青年らは、僅かな俸給に満足して、つまらぬ遊びに耽るものが多かつた。然るに私の相對してゐた人は、いつも一二冊の雑誌や、書物をもつて来て、ほかの人らが煙草をふかし、馬鹿噺をしてゐる暇に、それを一枚でも二枚でも讀んでゐた。私は此人の品性や態度を見てゐ

たが、事々に感じたので、心ひそかに此人の指導を受けようと考へたのである。此人は京橋區西紺屋町の素人下宿の二階の一室を借りて、そこに住ふて居たが、私は、土曜日の午後の歸りには、できるだけ此人の下宿に立寄ることにした。其頃は土曜日を半屯といつて、半日休んだものである。

五回目か六回目か、この人の下宿に立寄つたときであつた。机に對ひ合つて話してゐるうちに、私は其机の上に、折皮表紙、金椽の書物のあるのを、ちらと見た。今は其様な本は珍らしくはないが、其頃は實に珍らしかつた。えらい美麗な書物であると思ひ、是は何の書物ですかと言ひながら、手に取つて其表題を見ると、「新約聖書」とある。然し私にはこれが何の書物であるか解らなかつた。「是は何が書いてあ

一四
る書物ですか」とたづねると、「これは聖書といつて、基督教の書物である」と言ふのであつた。

其頃、私は基督教といふ名さへ知らなかつたが、何うやら切支丹らしく感じたので、「あなたは切支丹宗の人ですか」ときくと、其人は、「はい然うです」と言ふのであつた。私は大いに驚いた。私は大あわてに、あわてゝ、其家を逃げ出したのであつた。

私の世話になつてゐる親戚の家は、麴町區永田町二丁目の八拾壹番地、山王公園の裏であつたから、此の下宿とは相應の距離であつたが私は驚愕きの餘り、夢中で歸つた。何故、あのやうな善良な人が切支丹を信ずるのであらう。是は實に不思議でならぬと。こんなことを考へつつ歸つたのであるから、夢中で我家に辿りついたのも寧ろ當然であつたらう。

問題の聖書

人は感情の動物であると言ふが、實に其語の通りである。私の尊敬してゐた人が切支丹であると思ふと、其人に對する私の感情は變つて來た。昨日までは眞面目な人、やさしい人、親切な人、と感心したのであるが、今日は、それらを妙な眼で見るやうになつた。切支丹ときくと、その眞面目な顔つきも變に思はれ、その莞爾とした笑顔も、何だか薄氣味わるく感じ、机の下から魔法でもかけはせぬかと心配するやうになつた。此事があつてから私は、土曜日が來ても、其人の下宿に立寄ることをしなかつた。

ところが其人は親切であるから、今までと少しも變らず、土曜日が来る毎に、「君、今日歸りに寄りたまへ」と懇切に招請されるのであった。然し私は嘘を言ふて行かなかつた。親戚に厄介になつて居るとか來客があつて多忙なとか、何とか彼とか口實をもふけて、其招きを斷つたのである。處が或る土曜日のことである。今日は「たとひ君が親戚に厄介になつてゐるといふても、來客があるといふても、是非、君をつれて行く」と、言ふのであつた。此時は口實も功なく、遂に其人の言ふがまゝに、その下宿に連れて行かれたのであつた。

下宿の二階にあがると其人は私に向ひ「君は、なぜ歸りに寄らないのか」と笑つてたづねた。そして徐ろに机上の問題の書物を持出して、「君は此前この書物は何であるかと尋ねたから、基督教の書物である

と、答へると、君は妙な顔をして、切支丹かと言ふから、然うだと答へると、顔色が眞蒼になり、身震ひして逃げ歸つたのである。親戚の厄介になつてゐるから、身が自由にならぬとか、來客があつて忙しいとか言ふのは口實だ。原因は切支丹を怖れるのであらう。」と、斯う單刀直入に斬込んで來るのであつた。

私も率直に、「然うです。全然くそれに違ひないのです。」と言つた。それから暫く兩人のあひだに問答が始まつた。

外村「なぜ、あなたのやうな善良な人が、切支丹のごとき恐ろしい宗門にはいりましたか。」

其人「なにが恐ろしいか」

外村「その恐ろしい理由は知りませぬ。然し幼少のときより切支丹は

恐ろしい宗門であると聞かされてゐます。切支丹は魔法をつかふ。今でも其魔法で造つた二つの置土産がある。一つは豆腐である。一升の大豆から、あれだけの豆腐を造り、なほ其上にあれだけの殻が残る。これは魔法で造るからである。尙も一つは竹で編んだ簾である。是を懸けて置くと、晝間は家の中から外を見透すことができ、夜になつて灯を点ると、外から中を見透すことができる。斯な話も聞かされた。そして切支丹を信ずれば磔刑にあふと言ひ聞かされてゐる。」

其人、その話は私も聽いてをる。然し私は友人に基督教信者がゐて、其人が親切に導いてくれたので、今は基督教信者になり、お蔭で人からも幾分の尊敬を受け、また信用もされるやうになつたのである。基督教は君の言ふごとく恐ろしい宗教ではない。人間をして眞の神の聖旨

にかなふ正しい生活をさせる宗教である。是が基督教である。宗教の食はず嫌ひは不可ない。先づ其の教を聽いてみるのが肝要である。聽いたらうへで悪むと思へば、寧ろ大いに攻撃すべきである。若又、基督教が眞理であれば、たとひ全世界の人類が反對しても、之を信ずべきである」

其人は斯の如く、理を盡して、熱心に基督教を説き明かしてくれたので、私は大いに感激し、「それでは又折々お邪魔に參上して、御高説を拜聽することにいたしましたませう。」と言つて、其の家を辭したのであつた。それ以來、まへほど數多くは行かなかつたが、時折り、その下宿を訪問してゐた。

初めに映じた教會

其人には二人の友人があつた。此人たちはみな基督信者であつた。これらの人は、時々寄合ふて興味のふかい話をして居つた。私はこの人たちの清談を聞いてゐたが、如何にも談が立派であり高尚であるので、自分の身の爲になると思ふた。時たま他の青年の家を訪問することもあつたが、彼らは煙草をふかし、馬鹿噺ばかりするので、自分に取つては何の獲る所もなかつた。基督信者とは雲泥月髓の差であつた。比較にならなかつた。それで私は先づ基督信者を信用するやうになつた。同時に基督教についても感嘆するに至つたのである。

かねて其人は、何とかして私を基督教に導かうとする親切心があつたものと見え、或日曜日の夕暮、私の家に來訪されたのであつた。二人つれだち、散歩にてかけると、或處へ來て、其人は一寸と時計を見た。あゝ七時に五分前だ。「君、七時から私の教會で集りがあるのだが私と一緒に行きませんか。」と言ふのであつた。私は胸がどきんとした。然し怖い物見たして、行く氣になつた。教會堂に入ると、先づ私の眼を惹いたのは、會堂内の瀟洒なことであつた。私は低い聲でたづねた、「一體、あなたがたの信仰する神は、何處に祭つて在るのですか。」と、其人は笑つた、「私たちの信ずる神は、天地を造り、萬物を主宰する神である。故に小さな會堂内のみ祀り込むべきではありません。神は何處にも在し給ふのである。教會堂は、眞の神を信ずる同志の輩が集つて禮拜する場處である。教會堂はまた神の道を宣傳へ、ともに

感謝し、ともに祈りを捧ぐる場處である。」

私は、この説明を聴いて、きよろきよろ會堂内を見廻した。妙な處に西洋箏笛があるな。と思ふ間もなく、その西洋箏笛が鳴り出した。私は實に驚いた。「あれは何ですか。」オルガンです。今こそオルガンは田舎の小學校にでも備へ付けてあるが、其頃、この樂器は珍らしい物であつた。

それから讚美歌はうたはれ、祈禱は捧げられ、聖書は朗讀された。やがて牧師の説教は始まつた。然し何のことだか、其の牧師の説教が始から終りまで少しも解らなかつた。牧師が熱烈に教壇を叩いて説教されたので、あんなに教壇を叩いて、手は痛くないだらうかと思ふばかりであつた。

集りが終つたので外へ出ると、其人は私にたづねた、「君は今日始めて教會に集つたのであるが、何と感じました。」私は無遠慮に答へた、「基督教は、つまらぬことを喜んで居るのですね。寄席にでも行つて圓朝の講談でも聴く方が、よほど面白いです。」私は言ひ過ぎたかと思ふて、其人の顔を見ると、其人は相變らず、にこにここと笑つて居るばかりであつた。が、「面白い」と言つて、次の話を語り出たのであつた。

「新約聖書、ヨハネ傳第九章に、耶穌が生れながらの盲人の眼を癒した話が載つてをる。耶穌は途をゆくとき、生れながらの盲人を見給ふたが、彼を慰み、地に唾し、泥をつくり、これを盲人の眼にぬり、シロアムの池にて洗へと仰せられたのである。盲人は行つて、耶穌の仰

せの如くなしたが、不思議にも、生れながらの盲人の眼は開かれたのであつた。

これは奇蹟である。然し奇蹟論は別として、其生れながらの盲人が目明きになつた事實は、我らに偉大な教訓を與へる。盲人は耶穌の命じたまふことを實行して目明きになつたのである。

君は今夜、始めて教會に集り、そして我々基督信者のやつてゐるところが、満らぬやうに見えたと言ふのだが、満る満らぬは何うでもよい。満らぬと感じても、今暫く忍耐して其満らぬことを行つて見る氣はないか。然うすれば君の靈眼はやがて開かるる時機が來て、今まで見ることの出來なかつた眞理を發見するに至るのである。」と

私はその巧妙なる話を聽いて驚きかつ感じたが、聽て其人に別れを

告げて家に歸つたのである。然し此時もその興味深い話を考へつゝ夢中になつて、知らず識らず我家に辿り着いたのであつた。私は余程、夢中になり易い人間であつたと見える。

ほどへてのち親戚の用事のため、京橋區の築地へ使ひに行つたが、歸りに小さな教會堂を見たので、其處に引着けられたのであつた。それは日曜日の夕暮であつたが、信者らしい人が、ぼつぼつ其會堂に入つて行くのを、私は眺めてゐた。さうすると私も、自然にそこへ入つて見ようかしらといふ氣持になつた。私の脚は其方へ進んだ。

言ふまでもなく是は何人にも勸誘されたのではない。全然任意でその氣持になつたのである。然しながら私は、その會堂の敷居を跨ぐのをひどく躊躇した。さうすると一人の信者らしい人が來て、「遠慮な

くお入りなさい』と聲を掛けてくれたので、それに力を獲て集りに列したのであつた。

ベンチに腰を掛けると、今の人は、三冊の書物を、私の手に渡した。それは新約聖書と、讚美歌と、祈禱書であつた。此教會は以前友人に導かれて行つた教會とはちがひ、起つたり坐つたりすることが多いので、勝手がわからず、どぎまぎして耻かしい思ひをした。説教者は西洋人であつたが、説教は解らなかつた。日本人の牧師の説教ですら解らない私に、西洋人の説教の解りさうなことはない。其説教は長かつたので、私は其所に入つたのを悔いたほどであつた。

集りが終つて戸外に出て、歸りがけに教會の標札を見たら、『聖保羅教會』と書いてあつた。翌朝、銀行に出勤して、私は『昨夜築地の『聖ホラ教會』に行つた』と言つたら、友人は大いに笑つた。それは耶穌の弟子のパウロといふ人の名を取つて附けたので、『聖パウロ教會』と讀むのです。と言つて親切に教へてくれた。求道の始めには、斯うした滑稽は何人にもある。

それから私は地方の支店に轉任したが、そこでまた教會に導かれ、親切なる牧師の厚意をうけて遂に基督信者になつたのである。回顧すれば私が故郷を離れて上京する際、母は必ず善良の人を友とせよ、悪友と交はつては不可ないと誠めてくれた、此言が、決局私を基督信者になした結果を産み出したことになるのである。斯くして私は神を信じ、基督の十字架に救はれ、恩寵のうちに感謝の生活をなすに至つたのである。斯の如く私の救はれたのも亦友情の關係からであつた。

ザアカイはその知己マタイとの友情關係よりして、耶穌に會見したいとの志を起すに至つたものと思ふ。

時代は移る

ザアカイは、耶穌の風説を聞いてゐたので、それに會見してみたくなつた。是が、も一つの動機となつたのであらう。

耶穌はユダヤのベツレヘムに産ぶ聲をあげ、ガリラヤのナザレに成長して三十歳に至り、それから救の事業を興し給ふたのであつた。そして時には山の上に多くの人々を集めて教をなし、或時には廣漠たる原野に多數の人々を集めて奇蹟を行ひ、多くの病める者を癒し、死者を甦らせる等の貴き働きをなされて、名聲大に高まつていつたのである。

つた。其エリコに入り給ふたときも、盲人を癒し給ふて、その評判は群集のうちに擴がつたのであつた。此風説を耳にしてザアカイも、耶穌を見たいと志したのである。我々のうちにも亦た基督教の種々なる風評を聞いたことが動機となつて、基督教に對する求道の志を起すに至つたものが多數にあると思ふ。

或人は日本の宗教史の一部分である切支丹の物語などを讀んで、基督教に興味を起した人もあらうと思ふ。私は今それらの事跡をここに回顧してみる。

西暦一五四九年(天文十八年)に、フランス・ザビエーは、日本人の半次郎を伴ふて印度支那を経、我朝に來りて鹿兒島に上陸したのであつた。斯くて彼らは十二年の後ち、即ち永祿四年に京都に上り、時

の將軍足利氏の許可をえて、その布教に従事したのであつた。超えて同じく十一年、彼らは織田信長の援助をうけ、近江の安土に大成寺を建て、京都に南蠻寺を建立して大にその傳道に努めたのであつた。天正のころに至りては、更に彼らは驢足を伸ばして近畿方面に布教をなし、轉じて北へ北へと進みいで、仙臺、會津より金澤に達し、一方は遙に北海道までも布教した。當時その教會堂の數は全國二百五十に達し、信徒の數は三十萬に及んだと言はれてをる。特に京都に於ては大名小名より一般の人々に至るまで多く之を信じ、その勢ひ甚だ隆々たるものがあつた。

私は毎々京都にゆく。そして先斗町といふ、妙な名のつく町を發見した。是は珍らしいと思ひ、何か由緒があらうと、二三の人に尋ねた

が何人も知らぬと言ふ。ところで名古屋の金城女子専門學校の校長市村與市氏が、こうした研究に明るいと思ひ、其の由緒を尋ねて見ると、その説明はこうであつた。先斗とはラテン語であつて。英語のブリッチ、日本語の橋である。昔、南蠻寺にゆく途中に川があつて此川に橋が架つてゐた。天主教の人は常にラテン語をつかつたので、此橋を先斗と呼んでゐた。是が今尙ほ町名として残つてゐるのであるとのことであつた。

また京都の一隅に銅蛇と稱する字がある。これは舊約聖書の中にある、モーゼが銅の蛇を造つた云々といふ記事から出た字である。京都の祇園祭に曳き出す鉾の一つの後には、之も同じく舊約聖書のなかに誌してある、「ルツの落穂ひらひ」の繪が刺繡となつて掛けられてある。

丸太町の町名の由緒が更に興味がある。耶穌は在世のとき、ベタニヤといふ村に住ふてゐる、マルタ、マリヤと呼ぶ二人の姉妹を訪はれた。これは新約聖書に誌されてある有名な物語であるが、此名を取つて丸太町と付けられたと聞及んでゐる。これらを憶ひ合はして見ても、其昔、いかに基督教がこの地方に於て隆盛であつたかを偲ぶことが出来るのである。

然るに時代は變轉して豊臣氏の極端なる禁教となり、次で徳川氏の外教に對する窘迫となり、漸次、基督教はその勢力を壓迫さるるに至つたのである。此間、幾多の熱心なる切支丹教徒は、甘んじて迫害の犠牲となり、その殉教の死を遂ぐることを光榮となしたのであるが、彌々苛烈なる檢舉と辛辣なる苛責が加はつたので、遂に島原の反亂を

最後の火花として、切支丹は消滅するの狀態となつたのである。斯くて天文十八年より寛永十五年に至る、約百年に亘る彼らの事業は、その跡を斷つに至つたのである。

然し之がために基督教の生命は全く斷たれたものではなかつた。東北地方には「隠し念佛」と稱するものがあつた。是は表面、南無阿彌陀佛の六字の名號をかゝげ、裏面には基督教の精神を傳へて來たのである。九州の五島には地理的關係よりして迫害を免かれ、その信仰を一貫して來たものも有ると聞及んでゐる。斯の如く基督教の生命の泉は潜流となつて世々に繼續してゐたのである。

耶穌は過ぎ給ふ

然るに天下の大勢は一變し、時代の推移とともに帝國の國是は確立し、鎖國の鍵は解け、基督教防止の掟はここに撤廢されたのであつた。斯くて日本の港灣は開かれ、列國との通商は行はれ、爰に切支丹は復活の曙光を見、更にまた新教の傳來をも見るに至つたのである。

新教の宣敎使として來朝せし人々は、安政六年、米國エビスコバル教會のジョン・リツギンス及チヤンニング・ムーア・ウキリアムスの來朝を始めとして、米國長老教會のジェー・シ・ヘボン夫妻、米國リフォームド教會のエス・オール・ブラオン及びデー・ビー・シモンズ來り、暫し後れて同教會ギドー・フルベツキが來朝したのであつた。更に翌年より明治五年に至る間において、ジェー・エツチ・バラ夫妻、ダビツド・タムソン・コルネス夫妻、エツチ・スタウト夫妻、カ

ロゾルス夫妻・ミス・メリー・ギダ、ウォルフ夫妻、エツチ・ルーミス、イ・オール・ミロル、メリー・ブライン、ミセス・エル・エツチ・ピヤソン、ミス・ゼ・エヌ・クロスビーが相亞いて來朝した。彼らは傳道に教育に醫術に、有ゆる方面に力を注ぎて活動し、ことに聖書の翻譯などに全力を盡す人たちもあつた。斯くして彼らは新日本（新日本）の指導者となり、青年學徒を鼓吹して、日本文明の先驅者となしたのである。當時その感化を受けた人たちの中には、本多庸一、押川方義、井深梶之助、植村正久、熊野雄七、眞木重遠、伊藤藤吉、藤生金六、山本秀煌、其他の諸氏があつた。彼らは英語を學び、或は醫術を修めんと志して、外國宣敎使の許に通學したのであつたが、何れも彼らの人格に感化せられ、基督教の眞理に感激して其教を信ずるに至つたの

である。

日本に於て最初に基督新教を信じて洗禮を受けたる人は矢野元隆氏であつて、次に受洗したのは肥前佐賀藩の重臣村田若狭と、その末弟綾部恭の二氏であつた。爾來、信徒の數はやゝに加はり、明治五年三月十日、横濱居留地百六十七番の小會堂に於て一個の基督教會は創設されたのであつた。當時その信徒の數は僅々十數名に過ぎなかつたが茲に年を経ること七十有餘年、あだかも基督教會は燎原の火の勢をもつて日本全國に燃え廣がつたのである。

斯の如く、今や基督教會は都市に津々浦々に到るところ弘布されて、日本全國殆ど教會と傳道所のあらざるところなきまでに發達したのである。然も其間時世は大なる變轉をした。基督教會に對する一般の思想

も變つて來た。

顧みれば基督教會の初めて我國に渡來した當時は、魔法である。汚れの宗教である。我國民思想に反する宗教であると、極度に排斥されたのであつた。然しながら是らの思想感情は時代とともに拭ひ去れて了ふたのである。

惟へば時世の變化も眞に驚くべきである。畏くも明治天皇陛下は憲法發布と共に信仰の自由を與へ給ひ、また遙々英國より傳道のために來朝せる、救世軍大將ウキリアム・ブウスに拜謁を賜はり、さらに今上天皇陛下に於かせられては、米國より來朝せる、オーボルン神學校々長スチュアルド博士に拜謁を賜ふたのであつた。皇太后陛下、京都に行啓あらせられたる砌には、基督主義の同志社女學校に、基督教

主義によつて經營さるる郡是製絲場に行啓あらせらるるの光榮に浴したのであつた。誠に恐懼感激の至りである。

斯くの如くして、基督教は社會一般に理解され、數多宗教のあるなかで、基督教は最も進歩したる宗教として認識さるるに至つたのである。更に基督教の實蹟より言へば、或る青年は極めて不眞面目なる懶惰のものであつたが、基督教を信することによつて、頗る眞面目に勉強する善良の青年となつた。或る大酒家は基督信者となりて禁酒を實行し、まことに純良なる勤勉の人となつた。或はまた道德的人格者であつた人が、基督教を信することにより、更に宗教的人格者となつて眞に國家を愛し、同胞の魂を憂ふる人となつた如き事實は、擧げて算ふることの出来ないほど多數にある。

以上は歴史の物語る事實であり、我らが眼前に見た事柄である。唯是のみならず基督教は、多くの文學、藝術、または活動寫眞にまでその色彩を現はしてゐるのである。假りに是らの中より基督教を取除いたならば、實に荒寥たるものとなるを疑はない。

兎も角も多くの人々は、前に述べたやうな事柄を、或は書物に據り或は傳聞したことから、基督教を求めんとする志を起すに至つたものである。ザアカイは、耶穌に關する種々の事實と、その風説を聞いて、耶穌に會つて見たいといふ志を起すに至つたと思ふ。然るに幸なるかな、自分の住つて居るエリコの町を、耶穌が過ぎゆき給ふのである。好機逸す可らずで、彼は一目でもよいから、耶穌を見たいものと走り出たのであつた。

四〇
さて行つて見ると、群集は耶穌を取り圍んでゐた。然も彼は身の丈が矮いので、耶穌を見ることができなかつた。何でもないやうな話であるが、非常に興味がある。

障 害 物

求道者が基督教に近づいて来て、これは如何なる宗教であるかを窮めんとするときには、種々なる妨げがある。私は或一人の求道者を、その人の住へる近くの教會に紹介したことがある。暫くして此人が教會にゆくや否やを訊いてみたところ、實は一回だけ行つてみたが、教會堂が餘り穢いので、再びゆく氣になれなかつたと言ふことであつた。其人には會堂の穢いのが妨げとなつたのであつた。

亦或一人の婦人の求道者を、或教會に紹介したが、其人は讚美歌をうたひ、祈をするのが嫌ひで、集りに出なくなつた。或學生は、教會に妙な青年がゐて、學問もなにもないくせに、如何にも熱心な振りをして斡旋するのが癪に障り、つひに其處に行かなくなつた。

また或人は、二三回いつてみたが、牧師があまり洗禮を勧めるので行くのを中止したと言ふのである。尙此外にも、あの牧師の説教がつまらぬから教會に出るのを止めたと言ふのもあり、甚だしきは牧師の面が氣に入らぬから、教會に行くのを止めたと言ふのもある。眞に迷惑千萬なことである。

兎に角、基督教を窮めやうとするには、様々の妨げがある。ザアカイには群集といふ妨げがあつた。そればかりでなく、ザアカイ自身に

も足りぬところがあつた。ザアカイは背が矮くかつた。丁度そのやうに求道者にも、また足りないところがある。ザアカイの如く身體の背が矮くなくても、宗教的思想の背のひくいものが少くない。

或大學出身の一人はこう言つた。「私は最高學府を出た一人であるが、いまだ嘗て宗教の問題に觸れたことはない。然しそれがために生活上の不自由を感じたことはない。是でも宗教は信じなければなりませんか。」と、此が最高學府を出た人の言ふことであるかと思へば、眞に宗教に對する思想の低級であるのに驚くのである。

人は格別、親に對して孝行をせずとも、亦君に忠義を盡さずとも、或は國家を愛せずとも、生活するには何らの差支もないだらう。然しながら斯る生活は犬馬に等しい生活である。決して人間としての生活

とは言へない。かゝる生活は極めて無意義な、そして下劣な生活である。矢張り人間としては親に孝を盡し、君には忠義を盡し、或はまた國家を愛するものでなくてはならぬ。

斯の如く道徳的に生活するのが、意義ある高等な生活であると言はねばならぬ。其如く宗教的に生活することは、更に意義深く高尚なる生活である。

また或人々は、宗教は安心立命を獲るの方便であると言ひ、また人格修養の手段でありと言ひ、御利益を獲る方法であると考へる。然しながら之も大なる考へ違ひである。宗教は決して安心立命を獲る方便でもなく、人格修養の手段でもなく、御利益主義で信ずるものでもない。宗教は眞の神と人との人格的關係を正しく生活するのである。是

が即ち宗教である。

西郷南洲は「敬天愛人」と言つたが、敬天とは宗教であつて、愛人とは道徳である。宗教は對神關係である。道徳は對人關係である。そして對神關係をもつて對人關係を活かしてゆくのが宗教道徳である。基督教は天の父なる神に孝を盡す心にて、親に孝を盡し、天父に忠を盡す心にて、君に忠を盡し、天父を愛する心にて、國を愛するのである。是が基督教の説くところの宗教道徳である。多くの人たちは道徳倫理の方面は判つても、この宗教道徳の方面の理會のできない人が少くない。これは甚だ遺憾である。兎に角、多くの人たちの宗教に對する思想はまだ低級である。

今日この家救はる

ザアカイは背矮きがため、耶穌を見ることを妨げられた。然し彼は見ることが出来ないといつて失望もせず、また落膽もしなかつた。彼は耶穌が見えないので、後もどりをしたか。決して左様なことはしなかつた。彼は何處までも耶穌が見たい。一目でも見たい。といふ熱心からして、道傍の桑の樹に登り、そして耶穌を見ようとした。稅務所長の樹登り、なんと面白い話ではないか。

我々はここで大いに學ぶところがある。其れはザアカイの熱心である。何事をなすにも熱心がなくてはならぬ。昔モーゼは燃ゆる火の中に神の聲を聞いたといふ物語がある。我らも亦熱心がなくては物事の

眞理を明かに覺ることはできぬ。況や宗教問題に於てをやである。

私は、基督教を求むる人々が、ザアカイの熱心に學ばんことを切望するのである。ザアカイは無邪氣であつた。彼は税務所長であるからして、群衆の前で樹登りなどはできぬと、澄し込まなかつた。彼はどうしても耶穌を見たいといふ熱心から、幼児のやうな無邪氣な心、謙虚な心になつたのである。そして我を忘れたやうな態度となつた。此心をもつことが、求道者には最も肝要である。

耶穌は仰せられた。「凡そ幼児の如くに神の國をうくる者ならずば、之に入るに能はず。」(マルコ傳一〇・一五)と、又た「幼児らの我に來るを許せ、止むな、神の國は斯のごとき者の國なり。」(同上)と言つて、「幼児を抱き、手をその上におきて祝し給へり。」(マルコ傳一〇・一六)とある。基督

教の眞理を窮めんとするには、前に言つた熱心と、今言つた幼児の心とをもつことが必要である。求道者はこれらの點をザアカイに學ばれんことを希望する次第である。

耶穌は弟子たちを従へ、群集に圍まれつつ町に御入りになつたが、樹の上のザアカイに目を留められ、ザアカイよ急ぎ下りよと仰せられたのみならず、「今日われ汝の家に宿るべし。」と言はれた。是はザアカイに取つては思ひも寄らぬ恩寵であつた。

ザアカイは、たゞ一目だけ耶穌を見れば、それにて満足したのであつたかも知らぬ。然るに耶穌はお前の家に宿つてやらうと仰せられた。意ふに勝る恩寵とはこの事であらう。

基督教は如何なる場合にも、思ふに過ぎたる恩寵を與ふる宗教であ

る。英語を學ぶため、教會のバイブルクラスに來た學生が、遂には救はれて基督信者になつたものもある。職業の紹介をたのみに來た人が救はれて信者になつたものもある。ヒステリーの婦人が、癒さるるため、祈りを求めに來て、その魂を救はれ、靈も肉も健全かになつて、神のため善き奉仕を續けるに至つたものもある。

ザアカイは、耶穌を一目見たならば、それで宜いと思つたに拘らず耶穌は我家に宿りたまふと聞いたのである。これは言盡されぬ歡喜であつたらう。

基督教は耶穌基督の人格を中心とする宗教である。唯善いことをせよ、悪るいことをするな。と教へるだけの宗教でない。耶穌の人格を模範となして克己修養をなし、耶穌のやうな人格者になれと言ふだけ

の宗教でもない。基督教は耶穌基督の人格を中心となし、天の父なる眞の神を認め、神を知ることによりて、己れの罪とその罪の結果の恐ろしさを覺り、神の前に罪を悔改め、耶穌基督の御同情と御慈愛、特にその十字架に於ける犠牲的愛、即ち贖罪愛を信ずることによつて救ひを獲る宗教である。

かくて神との人格的關係を正しくし、自己中心より神中心の生活に生れ更らして戴くのである。ザアカイは耶穌を我家庭にお迎へして、耶穌の崇高偉大なる人格に接し、その人格を通して更に神を明らかに覺り、神の前に自らの罪深さを認め、耶穌のまへに其罪を悔改め、その悔改めの實を現はしたのであつた。

ザアカイは、我が所有の半を貧しき者に施こさん。若又、税吏とし

て是までに不正な行爲で金を取つたことがあるならば、其を賠償いたしたいと申出たのである。この行爲こそザアカイが悔改の實を現はしたのである。神の前に罪を覺り、その罪を悔改めても、只だ悔改むるだけでは何の役にも立たぬ。悔改めて其實を現はすことである。悔改むるとともに所有の總てを、否、その身もその魂も耶穌基督に捧げ、神に捧げて、主のもの、神のものとせねばならぬ。其れが信仰である悔改と信仰とは同時に働くものである。

耶穌はザアカイの悔改と信仰とを見て喜びたまふた。「救ひは今日此家に来れり。此の人もアブラハムの子なればなり。」と仰せられた。耶穌基督の世に來りたまふた目的も、また滅び行く魂を尋ねて之を救はんがためであつた。我々はザアカイの熱心と、その幼兒のやうな心を

學ぶとともに、耶穌基督の尊き御同情と、御慈愛に導かれ、その深き恩寵に與らねばならぬ。

ザアカイは其後、耶穌の十字架と復活と昇天とを目撃し、殊に五旬節における聖靈降臨の御榮光を拜して、彌々その信仰を深めたのであるが、後ちにはカイザリヤに傳道旅行をなして、終には同地の監督となつたさうである。

道を求むる人々に對して、この興味あるザアカイの悔改と信仰との物語は、最も適切な「志をり」であると思はれたから、私はここにその感懷を披瀝したのである。此一片の物語により、道を求むる人々が、神を信じ、基督を信じて、救ひを完ふするに至らば、私の言ひ知れぬ感謝である。(終)

聖書

信ぜし者は幸福なるかな、主の語り給ふことは必ず成就すべければなり。(ルカ傳第一章四五)

信仰は聞くよりいで、聞くところは神の道に由るなり。(ロマ書第十章一七)

斯くてなほ我ら神に感謝して已まざるは、汝らが神の言を我らより聞きし時、これを人の言とせず、神の言として受けし事なり。これは誠に神の言にして、汝ら信する者のうちに働くなり。(テサロニケ前書第二章一三)

昭和十年二月七日印刷
昭和十年二月十日發行

定價十五錢

著者 外村 義郎

發行者 東京市豊島區池袋五ノ二三八
ト部 幾太郎

印刷者 東京市芝區濱松町一ノ一五
鷺見 知枝 磨

印刷所 東京市芝區濱松町一ノ一五
鷺見 文友 堂

不許
複製

東京市豊島區池袋五ノ二三八

發行所

アルパ社書店

振替東京六六一四八

植村先生の
推薦文

(上略)パンヤン、ゴオルドン、ブリス、フオックス、ウエスレイ、テレサ
其他信仰の偉人の實験を簡潔に寫した本書の如きは、求道者のためにも、
信仰の進歩を志す人のためにも、上に記した理由によりて、出来るだけ多
くの人に讀ませたい書物の一つである。『基督に生きる人々』を讀みて、其
の信仰生活の幅と深さに於て、増加したやうに感得する人も、必ず多數に
上るであらうと信ずる。

植村正久推薦
熊野義孝著

基督に生きる人々

四定送
六價料
二判五
八四二
頁錢六

本書に掲げ
聖徒廿二人

- | | | | |
|---------|----------|------------|---------|
| パンヤン | サボナローラ | ブリス大將 | ムウデー |
| ゴオルドン | ゲイヨー夫人 | フオックス | エ・ビ・オール |
| マリヤ・テレサ | ウエスレイ | フレツチャ | フエネロン |
| イヴァンス | ジョヂ・ミウラー | ロレンゾ・ダウ | クナツブ |
| カアトライト | ホキツトフキルド | カアジナル・ニウマン | |

悲哀のうちに祝福された

少女ゴルテ

(三版) 山本つち 譯

定價一圓・送料十錢

ゴルテは不幸な兒でありました。彼は環境のためねぢけた子供となつたのであります。然し此兒は光を愛する朗かな優性もありました。それが圓熟した老人や、品性の美はしい娘さんや親切な婦人たちに教養されて、おしまひには人格の高い、信仰の篤い、立派な婦人になるのであります。

是がゴルテの大體の筋であります。この物語を讀んで泣かぬ者はありません。子供のない點燈屋の爺さんがゴルテを拾つて来て、我兒のように可愛がります。間もなく爺さんは死にます。其後は金持の娘で、眼の見えなくなつた人が、ゴルテを引取ります。此娘をエミレーと云ひます。此娘さんが、實に淑徳の高い、氣品の具はつた、信仰の篤い立派な婦人であります。

恰も中世紀の聖女を見るやうな娘さんであります。此娘さんが複雑な富豪の家庭を無言のうちに引締めたが、一方にゴルテを抱へて教育するのであります。此處に如何にも高い信仰の調子があらはれてゐます。然しながら此側面には、さまざまの渦巻が起ります。逆潮が泡立ちます。ゴルテ、エミレーに對する嫉妬、反抗、怨み、誤解、迫害などが、大浪小浪のやうに打寄せます。此中にあつてゴルテは、壁の如く疎がれて行くのであります。『少女ゴルテ』は悲劇に始まつて、コミデーに畢るのであります。實に優秀なる基督教文學であります。

外村義郎著 (好評！第拾版)

◎神を求むる人々へ

定價二十錢
送料四錢

壹萬部發行！外村氏の特色ある五つの説教を蒐めたものである
附録に同氏の『我が傳道の生涯』が添へてある。傳道文書として好
個の快著である。

外村義郎著 (第六版)

◎信仰問答

定價十五錢
送料二錢

外村氏が各地傳道の時受けたる種々の質問に對し、最も丁寧に答
へたものを蒐集したのである。絶好の基督教道しるべである。

東京市池袋五丁目二三八番地

發行所

アルパ社書店

(振替東京六六一四八)

新刊

外村義郎著

求道の志をり

(十二ポイ組)

定價十五錢
送料二錢

表題に掲げてある如く、その内容は全く求道者に與へたる技折です。外村先生はザアカイを主題にとつて、自己の基督教を信じたる徑路を説き、信仰に入るの道を最も親切に教へて居ります。

次目 友情の宗教 切支丹でないか 問題の聖書 時代は移る
初めて映じた教會 耶蘇は過ぎ給ふ 障害物 今日この家救はる

外村義郎著 (第十版)

○神を求むる人々へ

定價二十錢
送料四錢

外村義郎著 (第五版)

○信仰問答

定價十五錢
送料二錢

八三二ノ五 店書社パルア 袋池市京東

(八四一六六京東替振)

賀川 豊彦序 シ・エ・ローガン著

(定價十錢・送料二錢)

◎ナザレのイエスは過ぎ給ふ

〔再版出来〕

初版五千部 忽ち賣切!

詩人の如く、預言者の如く、聖徒の如き、ローガン先生の傳道説教五つを蒐輯したものであります。先生は長く日本にゐる人だけに、其の説教がびつたりと來ます。實に好個の傳道パンフレットである。

四十三名の入信記録 (下部幾太郎編)

◎聖書に導かるゝ人々

(第十一版)

定價 五十錢
送料 六錢

此書は汎く基督教界に讀まるゝ書物であつて、既に定評があります。自信を以つて御愛讀を勧めます。

執筆者

山室軍平
金森通倫
村田若狭
植村正久
佐藤昌介

柏木義圓
長尾半平
河井道子
松山高吉
内村鑑三

江原素六
網島佳吉
堀本貞一
山本忠興
服部俊一

本多庸一
龜谷凌雲
中村榮助
林歌子
井深梶之助

小崎弘道
原胤昭
名田保太郎
高田勝安
外十九名

(店 書 社 パ ル ア)

八四一六六京東替振・八三二ノ五袋池市京東

終

